*Adam Bede*におけるHetty Sorrelの罪と罰について

嶋　田　貴美子
Kimiko Shimada

1

Marry Ann Evans (George Eliot) は本格的な小説を書き始める (*Scenes of Clerical Life* を1858年に出版, 本格的な長篇小説である*Adam Bede*を1859年に出版)大分前の1847年２月に, *Herald and Observer*という週刊新聞へ一つのfableをのせている。それは500wordsそこそこのとても小さな話ではあるけれども，後の彼女の小説理解の上には看過することのできない大きなテーマを含んだものであった。(1)

このfableにはIdioneとHieriaという二人の美しい女性が登場する。二人の女性といっても彼女らは人間ではない。Hamadryadとよばれる森に住む木の精である。この二人の美しいHmadryadsは森の中の，水が澄んだきれいな湖のほとりに住んでいた。そして二人とも湖におりて行っては水の表に映るものを見るのが何よりも好きであった。しかし彼女らがそうしたのは同じ理由からではない。Idioneはそこに映る自分の美しい姿を見るのが好きなのであり，木の葉や花々で髪を飾っては水の表に映る自分の顔をながめ，丸一日でもそれにほほえみかけているのだった。もし美しい水蓮の花などが水の表に広がってその彼女の鏡をそこなうようなことがあると，彼女は怒ってそれをひきさいたりしたものである。しかしHieriaは湖に映る自分の姿を見るのではなく，よく晴れた日，まっ青な空に浮かぶあわのような雲とか，夜になって現われる月とか星とかがその湖のまん中に映るのをながめては楽しんでいたのであった。彼女は湖の遠く深淵を見つめていたので，たとえ水蓮が湖の表をおおっても全く気にならないばかりか，かえってその花を美しいと思い愛するのであった。

二人が年をとり，老いの醜さがしのびよるにつれIdioneはだんだん湖に腹をたてるようになる。湖が満足のいくような美しい自分の姿を映し出さなくなったからである。彼女は水際に小石を運んで，その仕返しに湖にそれらを投げつけた。彼女は一日中顔をしかめ意地悪な顔をしていたので，湖はますます醜い顔を彼女に映し返すばかりだった。それでとうとうIdioneは湖から逃げて自分の木のうらにこもってたった一人で寂しく悲しく死んでいくのである。しかしHieriaはいくら年をとっても自分が老いて醜くなったことに気付かない。湖に映る自分の姿は見てはいなかったからである。そして彼女が愛した，湖の面に映る星に運ばれ，そこに住んで下の湖を見ている夢をみながら彼女は死んだのであった。

この対照的な二人の女性IdioneとHieriaからまっ先に連想されるのは*Adam Bede*の中のHettyとDinahである。またArthurとAdam, *Felix Holt the Radical*のMrs TransomeとEsther, FelixとHaroldなどにも彼女らの投影を感じる。George Eliotは後の彼女の作品の中で実に多くの人物の対照を行ない，そうすることによってお互いの性格やmoralをいっそう明確化する

ことに成功しているのであるが，その手法は，このfableを読むことによって小説執筆を手がける10年以上も前に彼女の文学活動の中ですでにもう確立されていたとみなすことができるのであろう。

このfableの中で湖は何を象徴しているのであろうか。それはIdioneが自分の美しい姿を映して楽しむ単なる鏡なのではなく，彼女らの心の中をも映し出すものでもあった。Hieriaが湖の面に見ていた雲や月や星は，Idioneがいつもみていたうつろいやすい我身の美しさなどではなく，永遠不変のもの，すなわち神の存在であり，湖の中にそれを追い求めていたHieriaは死すべきものでありながら結局永遠の命を獲得するのである。

*Adam Bede*の中で実際Hettyは我身の美しさに満足するために実に何度も鏡をみる。鏡がまだ貴重品の時代で全身を映す姿見がないため，きれいずきなMrs Poyserがぴかぴかにみがいて立てかけてある大きなテーブルに，その前を通る度に自分の全身を映しては楽しんでいた。(2)

*Adam Bede*の中でHettyとDinahのmoralがもっとも極立って対照されている場面は，DinahがHayslopeの，彼女のおばのMrs Poyserのところから次の日にSnowfieldの自分の家に帰るという日の夜，同じ時間の，三階にある隣り会わせた部屋の中での彼女たち二人の時間の過し方が描写されているところである。(Chap 15)

Hettyは部屋にかぎをかけ，引出しの奥から小さくなったローソクを取り出して，いたるところにしみの広がっている姿見ではなく，小さな手鏡に自分の顔を映してそれにほほえみかけている。現地主の孫息子Arthur Donnithorneのたわむれの恋の誘惑にすっかりさそいこまれてしまっているHettyの意識は，すでにもう農民の娘のものではなく，Arthurと結婚した自分の姿をあれこれと思い描き，地主の娘Lydia Donnithorneの化粧室にかかっていたある貴婦人の絵でみた髪型にまねてみる。そして，耳につけている小さなイアリングをはずし，単なる色のついたガラスだけれども何でできているか知らない人には十分貴婦人がつけているものと同じものにみえる大きなイアリングをつけ，黒いレースのスカーフで肩をおおう。空想は果てしなく広がり，Arthurの妻となり貴婦人となった時に身につけることができるであろう床をひきずるような立派なドレスや，外出する時に使うことになるであろう自分の馬車のことや，その他いろいろ華麗な様を想像し大いに虚栄心を満足させている。

一方Dinahは月明かりの中で窓辺にすわり，眼下に広がっている豊かな畑を見渡しながら，それまでしばらくの間彼女が世話をしてきて，彼女の愛情のこもった記憶の中に永久にとどまるであろう人たちのことを考えていた。彼女はこれから先の彼らの人生の旅路に彼らの前にあるかもしれない苦難 (struggles) や疲労 (weariness) のことを考え，例えそういうことが起ったとしても自分は彼らから遠く離れ何も知らないでいるだろうと思うといたたまれない気持にかられるのだった。彼女は愛 (Love) と共感 (Sympathy) の存在 (presence) が大地や空から放たれるよりもより深くよりやさしいものであることをなおさら強く感じるように目を閉じる。ただ目を閉じて身の周りに神の存在 (Divine Presence) を感じているだけで，心の中の不安や，そのような他の人々へのいたたまれないような心配 (yearning anxieties) がだんだんと溶けていくのであった。

このようにその夜のその時間のHettyの世界は，まさにfableの中のIdioneと同様に鏡と我身を飾る装身具と，身のほど知らぬ幻想とで成りたっていた。一方Dinahの世界を構成しているものは，窓外に広がる月明かりに照らされたHayslopeの豊かな畑に感じられる神の存在であり，またHayslopeに滞在している間に親密なコンタクトを持った人々への心配等であった。そしてその心配も神の存在を強く意識することの中に消えていくのである。

このlittle chamberにおけるHettyの世界はまさしくfableのIdioneの世界でありDinahが窓外に見ているものはfableの中のHieriaが湖の中に見たものであって，永遠にして不滅の世界であった。

すなわちfableの中の湖はまさにIdioneとHieriaの心の中を曇りなく映すものであり，彼女たちの人生そのものであって，George Eliotの，後の文字作品の中では彼女らに象徴される人々を取りまく社会の目となり，またGeorge Eliotの人間観や幸福論を抽象的な形で展開する背景ともなっているのである。それらを勘案するとこのfableはいわばGeorge Eliot（fableを書いた当時はMary Ann Evans）の人生哲学が吐露されたものであり，後の彼女の小説全体に通ずる主要テーマを示唆するものでもあった。特にそのテーマはGeorge Eliotに小説家としての確固たる地位を確立した*Adam Bede*で開花する。それゆえ私が意図したGeorge Eliotの人生観，幸福論を究明するためには，*Adam Bede*を研究することが最も適切だと思われるのでこの論文で再び*Adam Bede*を読み返すことにした。特にGeorge Eliotの小説の中で最も悲劇的運命をたどった人といわれるHettyの罪と罰に焦点をあててみていこうと思うけれども，George Eliotがある一つの事象を表現するのに必ずその対照となるものを登場させお互いの特性をより明確にしているように，*Adam Bede*の中だけでHettyの罪と罰を考えるよりもHettyとその人生の類似性がしばしば指摘されるThomas Hardyの*Tess of the D'urbervilles*のTessの罪と罰を対照させたらば，George Eliotの人間観幸福論をより深く考察できるであろうと思われるので，Tessの悲劇にも多くのスペースを費やすことになるであろう。

2

本学の紀要11号でも述べたとおり*Adam Bede*の主人公はあくまでAdam Bedeであり，小説の構成からするとHettyはheroineにもなりえない。しかし，*Adam Bede*におけるHettyの存在感は絶大なもので，George EliotはこのAdamやDinahよりもむしろHettyを描きたかったのではないかとさえ思われる。ロバート・スピート（Robert Speaight）が「ヘティ・ソレルは『アダム・ビード』の中で最も魅惑的な人物である。…どの点においても彼女は我々の同情を禁じることはない」（*George Eliot*, London 1954, P 45）と述べているように，それまでゆったりと心象を描きながら読み進んでいった読者の目は，Hettyが登場するやたちまちある緊張感を感じHettyにすいよせられる。[(3)]そしてその緊張感はHettyが島送りの刑を受け，小説の舞台から事実上消えるまでより一層高まるばかりである。それに比べてDinahはheroinの地位を与えられてはいるものの，現身の人間としての説得力に欠けている面が多い。これはGeorge Eliotが観念的にはfableの中のIdioneの生き方を否定し，Hieriaの生き方を肯定はして

いるけれども，自ら妻子あるGeorge Henry Lewesと駆け落ちするという反道徳的な行為をせざるを得なかった情念にもとずく人間の愚かさへの共感を潜在的に心の中に抱いていたからではないだろうか。そして読者もまたHettyの低いレベルのモラルしかなく，美貌がゆえに虚栄心ばかり高くて身の周りの親しい人々やかわいいもの美しいものへの愛情の欠如・非情な気持等に一応非難の目は向けても心の片すみで，すべてに模範的であるばかりか神性すらただようDinahに対するよりも，はるかに強くHettyに対して人間的共感を感じるからなのである。Hettyが罪を犯し，厳しい処罰を課せられたその運命を，読書がこの上もない悲劇だと思い同情するのは，作者のGeorge Eliotと読者のそういった共感の相互作用によってかもし出される感情ではないだろうか。結局，一点の非のうちどころのないDinahは愛するAdamと結婚して至上の幸せを得，そしてHettyは一たんは絞首刑を宣告されるという厳刑に処せられるのであるけれども，それはイギリス史上最も道徳律が厳しかったQueen Victoriaの治政下における必然的結末であって，George Eliotは自分の体験から[(4)]身にしみて感じていた人間の非合理性や，その昔Edenの園で神の言いつけにそむいたイブの愚かさの中に，人間的なものを強く感じていて，Hettyを描く筆の中にそれが集約されているとみなすことはできないだろうか。すなわち，George Eliotの社会意識におもねる道徳的立場と本心とのギャップが，Hettyの人物描写をDinahやAdamを描く筆の力よりずっと強力にしていると私は感じるのである。とにかく*Adam Bede*は一読した限りでは絶世の美人で虚栄心に満ちた17歳の村娘Hetty Sorrelのstoryのような印象を受けるほど彼女一人がクローズアップされている。しかしこの小説の中におけるHettyの真の役割は，正義感の化身のようで，性格に全く柔軟性と融通性のない主人公Adam Bedeが罪深く弱い人間に対して共感と寛容の精神を獲得するに至る過程での一つの素材を提供する者に過ぎない。この意味ではAdam自身の，のんだくれの父親Thiasの役割と何ら変るところはないのであるが，Hettyの存在そのものがこの小説の登場人物全部に多かれ少なかれ何らかの影響力を持っている点でHettyはThiasの場合とは大いに異なり大きなウエイトがかけられているのであって，そのことが読者にあたかもHettyがこの小説の主人公であるかのような印象を与える原因ともなっているのである。

*Adam Bede*のあらすじについては紀要11号の「*Adam Bede*にみるGeorge Eliotの女性観について」の中で述べてあるけれどもここではHetty Sorrelの罪と罰に焦点をしぼりそのあらすじを追ってみよう。

Hetty Sorrelは老齢の地主Donnithorneの下にある小作人，Martin Poyserの妹の娘で，両親が早世したためにPoyser家に引きとられ，Mrs Poyserの管理するdiaryでバターを作っている。ある日たまたまPoyser家を訪れた地主の孫息子Arthur Donnithorneはdiaryに入って行ってHettyと言葉をかわすうちHettyのあまりの美しさにすっかり魅せられていく。そのArthurの気持を敏感に感じとったHettyはすっかり有頂点になってしまう。Hettyは以前から自分の美しい腕をそこない，朝から晩まであくせくと働かなければならず，美しいドレスとか装身具などとは全く無縁の農民の生活がいやでならなかった。Arthurの両親も早くしてこの世を去りArthurは老Donnithorneが83歳という高齢であることから近い将来祖父のあとをつぎ地主にな

ることが約束されていた。地主の家の窓からチラリと見た老Donnithorneの娘Lidiaのドレスや，教会で見るLidiaの持ち物，装身具，馬車などはぜいたくで成りたっているHettyの世界を魅了していた。そこにふっと現われたArthurはHettyのばかげた幻想の世界に光明をもたらす存在となっていく。

Arthur自身は当時の社会通念から地主と農民の娘との恋，そして結婚が絶対的に不可能であることをよく承知している。しかし，自分に甘く安易な方向に向かいがちなその性格のためにHettyにますます近づいていく。

当時は「いなかに住むもっとも鋭敏な精神を持ち合わせている人たち」はArthurとか牧師のMr.Irwineなどのようなgentryに対して，ちょうどその昔，人々が背が高く人間の姿をした神々が通り過ぎるのをつま先だちしてながめた時に感じたと同じひそやかな畏れを感じるような時代だった。[(5)] Mrs. Poyserはその“いなかに住むもっとも鋭敏な精神を持ち合わせた”人の代表的人物でPoyser家の管理するHall農場をArthurとIrwineが訪ねた時，戸口まで彼らを迎えに出て低くひざを曲げておじぎをし，この機に臨んでほんのわずかな失礼もないようにしようと思う心配でふるえていたほどである。[(6)] このようなMrs. Poyserであるから道徳観念が強く自他共に対して厳しく間違った行為は決して許さない。そしてthere was no weakness of which she was less tolerant than feminin vanity, and preference of ornament to utility（彼女は女の虚栄と，実用的なものよりも装飾品を好む性向ほどがまんのならないものはない）[(7)] と思っているような女性であったからHettyに対して他の誰に対してよりも厳しくあたるのは当然である。またMr. Irwineが“her tongue is like a new-set razor.…”（『彼女の舌はおろしたてのかみそりの歯のようだ…』）[(8)] と言っているように自分の気に入らないことに対しては鋭い言葉をまくしたてる。それゆえHettyはこのおばをとてもこわく思っていて，1の部分で述べたDinahが故郷のSnowfieldに帰る日のその前の晩，Dinahの寝室と隣り合わせた自分の寝室でArthurの妻になるという幻想の中でladyのような髪型にしスカーフを肩にかけたり，大きなイアリングをつけたり鏡に向かって我身の美しさを映し出して楽しんでいた時，she would have been ready to die with shame, vexation, and fright, if her aunt had this moment opened the door, and seen her with her bits of candle lighted, and strutting about decked in her scarf and ear-rings（彼女はもし彼女のおばがまさにこの時ドアをあけて，わずかなローソクの明りで，彼女がスカーフやイアリングで飾りたてて気取って歩いているのを見たならば恥辱とくやしさと恐れでその場で死んでしまいたいと思った）[(9)] のである。Mrs. Poyserのそのような周りの人々への厳しい批判はすなわち彼らの住むHayslope村のcodeであり，したがって村人全員の暗黙の戒めを代弁するものであった。そしてHettyを追いつめ追いつめしていく目に見えない非情な力はこのような暗黙のうちにあるHayslope村のcodeであった。村人はそのcodeの枠内でしか生きることができず，そういう意味ではそれは村を秩序正しく平穏に保っていく大切なものであったが，同時にまた，その枠から外れた者にはことに厳しく自殺に追いやったり，殺人のような大きな罪を犯させたりする恐るべき力を有するものでもあったのである。

そのように鋭いMrs. Poyserの目と舌をかいくぐってHettyはArthurと密会を重ねる。Arth-

urは自分のしていることがいけないことであり，Hettyに誤った幻想を抱かせる恐れのあることだとは知りつつも密会をやめることはできない。Hettyとのこのような泥沼の関係は自分が軍隊に戻るまでのほんのつかの間のことだとたかをくくっているのである。しかしHettyはArthurに会えば会うほどArthurと自分との結婚の可能性が強まったものと錯覚しバラ色の夢をふくらませていく。そしてArthurが軍隊に戻るという二日前の晩，Hettyが縫い物を習いに行っているMrs. Pomfretの家からの帰り道の森の中でArthurとキスを交わしているところを，仕事で偶然通りかかったAdamに目撃されてしまう。Adamは村の腕ききの大工でPoyser夫妻はAdamとHettyとの結婚を内心期待し，一方Adamもまたひそかに Hettyを恋い慕いできることなら結婚したいと思っていた。それでAdamはそのただならない光景に激怒する。Arthurは21歳になったばかりであったがAdamは幼少の頃から知っている気のいいArthurを次の地主になるべき人として大いに尊敬し，よもや農民の娘などとそのような関係におちているなどとは想像すらできなかったからである。Arthurはその時初めてAdamがHettyを愛していたことを知り自分の愚かな行為に気付く。そしてHettyとの関係が決して深い意味を持つものではないことを言葉を尽くしてAdamに説明しようとするが，それは正義感の強いAdamをよけいに怒らせる結果となりAdamの決闘の挑戦を受けざるをえなくなる。戦いはAdamの勝利に終った。Adamの申し入れでArthurはHettyに彼女の誤った幻想を解き自分との関係を明白にさせる手紙を書きAdamに託す。Arthurが軍隊に戻って行ってまもなくAdamはHettyにその手紙を渡す。夜自分の寝室に上がってから手紙を読んだHettyは思いがけないArthurの冷たい言葉の連続をそこに発見し愕然とする。将来の夢が破れ，日常の何物にも何事にも興味をなくしたHettyは今の生活の転換という意味だけで，Arthurに比べたら何の魅力も感じないAdamと結婚の約束をする。周りの人々の祝福を受けてまもなく，Hettyは自分が妊娠していることに気付く。しかしその事実は他の誰も気がつかない。不思議にも，人を批判する目にかけては天下一品であるMrs. Poyserの目ですらそれを見破ることができないのである。Adamとの結婚が間近に迫った日，Hettyは結婚式に出席してもらい，さらにHettyがいなくなったあとのPoyser家を手伝うためにDinahを連れてくるという名目でSnowfieldに出発する。しかしHettyは最初からSnowfieldに行くつもりは毛頭ない。Arthurを訪ねて行こうとしたのだ。親しい人の目はごまかせても他人の目にはかなり目立つようになったおなかを気にしながらHettyはArthurがいるといわれるWindsorに向かう。旅をしたことのないHettyにとってその長旅は大変なものであった。持っていたお金もみんな使い尽くしへとへとになってたどりついたWindsorにはArthurはいず，Irelandに行ってしまったことを知る。そのような体の，文なしの自分がさらにIrelandにまで行くなどどうしてできようか。もはや教区(parish)の世話になるより他はない。しかしその教区という言葉はHettyにとって牢獄の次に我身に汚名をきせる言葉であった。HettyはHayslopeのおじの家に帰り許しとあわれみを乞いたいという気持ちにかられるが，すぐにその気持ちからしりごみする。Hayslopeまたはその近隣の村の彼女を知っている人々の前にその自分のみじめな姿をさらすことにHettyは堪えられなかったのだ。

Hettyは最終的にはどこかの畑の中の池に身を投げる覚悟で再びさまよい始める。しかし若

いHettyの生命力は彼女に容易に自らの命を捨てさせない。そのうち月満ち宿を求めたある民家でHettyは出産する。しばらくしてそこの女主人が外出した折，Hettyは赤ん坊を連れてその家をぬけ出す。Hettyは赤ん坊を池にすてもう一度Hayslopeのおじおばのところに帰りたいと思ったのだ。森に入って池を探すが適当な池が見当たらず，近くにあった小さな穴に赤ん坊を置き木ぎれや草をその上にかぶせる。そして急いで森から逃げたけれどもその時の赤ん坊の泣き声がどこに行っても耳にまといついて離れずとうとうHettyは赤ん坊を埋めた場所に引き返す。しかし赤ん坊はもうそこにはいなくなっていた。Hettyがとらえられたのはそれからまもなくのことであった。

Hettyはその嬰児殺しをかたくなに否認し続けるが，医者の判定，それからHettyが出産したその宿のおかみさんの法定での証言，また赤ん坊を抱いたHettyを森の近くで見かけたという男の証言等によりHettyは有罪となり絞首刑を宣告される。

Hettyは親しい人の誰にも会うことを拒否し，なおもかたくなに心を閉ざし続ける。そのようなHettyの心を開き罪の告白をさせたのはDinahの献身であった。Dinahは丸二日以上もHettyと共に牢獄で過し，処刑の朝も絞首台までHettyに付きそう。そしてまさに絞首台に行き着く寸前にArthurが死の赦免状を持ってかけつける。結局Hettyは島送りに減刑され，七年後刑を終えて帰国の途中に病死したのであった。

以上がHettyの罪と罰の全貌であるが，Hettyにとってその赤ん坊はどんな存在であったのか，またHettyは本当にその赤ん坊を殺したのか，そしてHettyのその罪は絞首刑という厳刑に値するものであったか，さらにまたHettyの罪の本質はどのようなものであったかをこれから見て行こうと思うが，その前にまず，先に述べたように，相対するものを置くことによってお互いがより明確になるという理由から，Hardyの*Tess of the D'Urbervilles*のTessの罪と罰を次の章でみることにする。

3

*Tess of the D'Urbervilles*には*A Pure Woman*という副題がついているように，TessはHettyとは異なり心からpure womanとよべる女性であった。

Thomas Hardyがこの*Tess of the D'Urbervilles*を書いたのは1891年であるからGeorge Eliotが*Adam Bede*を書いた30年余り後のことである。HettyもTessも同じ17歳の，男の目を引く美しい娘であり，異性との関係のもつれから人を殺し絞首刑を宣告されるという，表面的には同じような経過をたどることからお互いによく引きあいに出される小説であるが，Hardyはこの小説を書く時に*Adam Bede*のHettyを意識していたかどうかは全く疑問である。恐らくHettyは彼の念頭には全くなかったものと推測されよう。TessとHettyは人間性においてあまりにも異なり，Hardyの小説を書く手法がGeorge Eliotの手法と全く異なっているためにTessはHettyとは最初から相いれない女性として描かれているからである。しかしそのために，おのおのの小説の作者の人間観や人生観，あるいはまたHettyやTessの悲劇などを考える場合，両者を比較することによってより一層の成果が期待されるのである。

Tessの法的な罪はAlec d'urbervilleを究極のところで殺害したことにある。言いかえれば*Tess of the D'Urbervilles*の小説は主人公のTessがAlecを殺害するに至るまでの過程の物語である。それゆえTessの罪はHettyの場合と同じようにTessが小説の舞台に登場した時点でもはやすでに始まっていたのであった。しかしTessの小説への登場のしかたはHettyの場合とは全く異なる。Hettyが*Adam Bede*の中で一番最初に登場するのはAdamの母親Lisbethの言葉の中においてである。Hettyはそこですでに経済観念がなく高慢で何の役にもたたない女性として紹介されている。[10] それはとりもなおさず作者George Eliotの言葉であり，そのためそれは来たるべきHettyの不幸を暗示するものともなっている。ところがTessの場合は，Tessの住むMarlottの村の伝統的なお祭りであるMay-Day danceにTessが興じている場面である。Tessの容姿についてHardyは次のように言っている。

> She was a fine and handsome girl—not handsomer than some others, possibly—but her mobile peony mouth and large innocent eyes added eloquence to colour and shape. She wore a red ribbon in her hair, and was the only one of the white company who could boast of such a pronounced adornment.[11]
>
> (彼女はきれいな美しい娘であった—もっと美しい娘も何人かはいたであろう—しかし，彼女の情感あふれるぼたんのような口と大きなあどけない目はその見目形に豊かな表情を与えていた。彼女は髪に赤いリボンを結んでいたが，そのようなきわだったかざりを誇ることのできる者はその白一色のなかまの中には他に誰もいなかった。)

この描写の中に見られるTessの将来の不幸を暗示すると考えられることは，Tessが美人という点ではHettyのように一点非のうちどころがないような美しい少女であったのではなく，特にその“ぼたんのような口”に象徴される個性的な美しさ，すなわち官能美を備えた少女であったということである。Tessの運命を左右したのはまさにこの官能美であった。

楽しく踊っていたTessはまもなくたちまち暗い気持におそわれる。それは父親のJohn Durbeyfieldが貧しい行商人風情には誰の目にも法外にうつる，行きつけの酒場の二輪馬車に乗り御者を従えて通りを通っていくのが見えたからである。Tessの父親はその直前に歴史に興味を持っているある牧師から自分がd'Urbervillesという古い由緒ある騎士の家系の直系であることをきいたばかりだった。その高貴な家系もすっかり没落した今となってはJohn Durbeyfieldの現在の生活に何の益も持たらさないのであったけれども，あまりに貧しい現在の境涯のために，そのささやかな朗報にDurbeyfieldは一家の窮状を打開する光明を見い出した思いがしたのであった。

踊りを終えて家に帰ったTessはそのことを母親からきく。占いの中に自らの行動の指針となる精神的なよりどころを見い出そうとするような頭の弱い母親の提案で両親はTrantridgeにあるd'Urbervilleという名のお屋敷が彼らと同じ祖先の出であることを推量し一家再興を期してTessをそこに奉公させることを決める。Tessは気が進まないながらも家族思いであることと，一家の頼みのつなであった馬を自分の不注意で死なせてしまったということも手伝ってd'Urberville家に行こうと決心する。d'Urberville家は富豪であったけれどもTessの父親が期待し

たような家系ではなくd'Urbervilleという名をお金で買っただけの家であり，家庭的には不幸で盲目の母親とどうしようもない放蕩息子Alecの二人が住んでいた。

AlecはTessに会った瞬間からTessに興味を抱きつきまとう。そしてとうとうある日Tessが市場に出かけた帰り途行き会ったAlecに馬にのせてもらったがために森の中に連れこまれ犯され妊娠する。TessはMarlotteの自宅に逃げ帰り出産するが生まれた赤ん坊はまもなく病死してしまう。その後三年ほどしてTessはTalbothaysにある母親の知り合いのdiaryにdiarymaidとして働くようになる。そこにいたのが牧師の息子のなのに兄たちのように牧師の道を歩むことを拒否して農業で身をたてるためそのdiaryに研修に来ていたAngel Clareであった。Angelは牧師の息子というgentry階級にある者として，そのdiaryの乳しぼりの娘たちの憧れの的であった。しかしその中のどの娘にも何の関心も示さなかったAngelは，彼女らと一風変った，a fresh and virginal daughter of Nature（新鮮な清純な自然の神の娘）であるTessにしだいに魅せられていく。[12] Angelの愛はAlecの愛とは全然異なっていた。Angelの自己抑制的な紳士的なふるまいにTessもまたAngelにぐいぐいひかれていく。Angelは農業家としての自分にとってTessは最高の妻になるであろうと思いTessとの結婚を決意する。しかしTessはAngelをこよなく愛しているにもかかわらず自分の過去のためにAngelの再三のプロポーズを受けることができない。Angelに対するその愛と，過去の汚点との板ばさみにぎりぎりまで悩み苦しんだあげくTessはとうとうAngelと結婚する。そして幸せに酔いしれていた当夜，心の最大の重荷であった過去のでき事を告白したとたん，Angelはまるで別人のようにTessに冷たくなり三・四日後Tessのもとを去る。Tessは実家にもどるが二・三日後再び家を出て働き始める。Flintcomb-Achの農場で働いていたある日外出先で偶然説教をしているAlecの姿を見かける。AlecはAngelの父親の説諭に心を動かされ過去の彼からは想像することもできなかった伝道者に変身しているが，彼もまたTessに気付き，そのとたん彼はみるみる昔の粗野な自分に引き戻されていくのを感じる。その後Tessの居所をつきとめたAlecは再びTessにつきまとい始める。ブラジルへ渡ったAngelから何のやさしい便りもないまま，Alecの誘惑に悩まされていた間にTessは父親を亡くし，母親と五人の子供たちは住んでいた借家を去らなければならなくなった。一家の経済的窮乏は厳しくTessはとうとうやむにやまれず富裕なAlecの情に再びすがらざるをえなくなる。するとまもなく帰国したAngelがTessを訪ねて来たのだ。TessはAngelに対する慕情にかられAlecを殺しAngelと共に逃亡する。しかし数日後捕えられ絞首刑になったのである。Angelはその後Tessのすぐ下の妹'Lisa-Luと結婚する。

Tessの性格はとにかくすべての点においてHettyとは対照的で責任感が強く，家族に対してやさしく思いやりが深い。彼女の運命を決定的にしたd'Urberville家に奉公に出たのも，再びAlecの手に落ちたのも貧しく暮らす家族への思いやりが主な動機になっていた。彼女の陥る不幸は何一つとして彼女の中にある性格的欠陥から生み出されたものはない。Tessの苦悩は自分とは無関係のところから押しつけられた苦悩であるため，HettyのNemesis[13]としてもたらされた苦悩に比べより痛ましい。言いかえればTessの悲劇はそのような，自分ではどうすることもできない運命によるものであって，Tessにそういった悲劇的運命をもたらしたものは強いて言

えば，AlecもAngelもすっかりそのとりこになってしまったTessの官能的な唇であり，Tessが最高にpure womanであったということにあったであろう。Tessはどんなに貧しくどん底の生活をしていようとも，gentryと結婚してladyになりたいなどという欲望は全く持っていない。Hettyの行為はすべて虚栄心とはかない幻想と他人の目をごまかそうとする偽りで成り立っていたけれどもTessをある行為にかりたてたものは前にものべたように家族を思うやさしい気持であり，また彼女の若き体にあふれる生命力であり，Angelと結婚してからはAngelの妻としての忠心であった。たとえTessの持っている官能的な唇がAlec d'Urbervilleの気を引いて彼女の悲劇的運命の発端を作ったとしてもそれは彼女のせいではない。Tessの不幸，悲劇にはHettyのそれのようなNemesisとして招来されたものは１つとしてない。ここにThomas HardyとGeorge Eliotの人生観，人間観の大きな違いがあるのである。

この二人の文豪のその違いを究明するために，HettyとTessの身に起った個々の問題についてもう少し詳しく見てみよう。

4

まず彼女たちは２人とも私生児を生むことになるがその赤ん坊は彼女らに一体どんな意義を持っていたのであろうか。

Tessが妊娠してd'Urberville家から自分の家に逃げ帰ってきた時，母親はTessを見るなり結婚するために戻って来たのかと思う。父親と母親がTessをd'Urbervilles家にやったのはd'Urberville家と親しい親戚になること，つまりTessがそのような身分の高い家の青年と結婚するようになることであった。Tessの口から事実を知った母親は，Alecとそのような深い関係になったのに結婚してもらえないのはTessのせいだと責め，家族の期待や近所への見えが最悪の形で損なわれたことに対し愚痴をこぼし彼女を慰めるような言葉はほとんど言ってはいない。Tessの気持は次の日目がさめた時の感慨の中に集約されるであろう。Tessは懐かしい昔のベッドに横たわり，目の前に他からの援助も同情も得られないでただ一人で歩いていかなければならない長い長い石ころ道を見ていた。彼女はひどく意気消沈してできることなら我身を墓の中に隠してしまいたいと思った。

このように彼女の両親は，次々とTessにふりかかる不幸に際しいつもそうであるが，決してTessの心のささえになることはないばかりか，よけいにTessを苦しめる存在となっている。しかしTessはそれに対して何の不満も抱かない。そのためTessは逆境に立つたびごとに独立心を増していく。しかし，いくら気丈な女性とてまだ17歳の少女である。世間の目を気にしないでいることはできない。家にこもりがちの日々の後出産するがまもなくTessは次のように考える。

> She felt that she would do well to be useful again－to taste a new sweet independance at any price. The past was past ; whatever it had been it was no more at hand. Whatever its consequences, time would close over them; ‥‥ The familiar surroundings had not darkened because of her grief, nor sickened because of her pain.

She might have seen that what had bowed her head so profoundly—the thought of the world's concern at her situation—was founded on an illusion. She was not an existence, an experience, a passion, a structure of sensations, to anybody but herself. To all humankind besides Tess was only a passing thought····alone in a desert island would she have been wretched at what had happened to her? Not greatly····Most of the misery had been generated by her conventional aspect, and not by her innate sensations.(14)

(彼女は我身を役立たせるようもう一度がんばろうと思った—是非とも改めて独立の美味を味わうために。過去は過去なのである。それがどのようなものであろうとももはや手近にはないのだ。その結果がどうであれそのようなものは時が閉ざしてしまうだろう。····周囲にある慣れ親しんだ物は彼女の悲しみのために陰うつになることもなく，彼女の苦悩のために病気になることもないのだ。

彼女は自分の頭をそれほどにまで低くたれさせているもの—自分の立場に対する世間の思惑は—はある幻覚の上に作るられたものであるような気がした。彼女は彼女以外の人には誰にとっても存在でもなく，経験でもなく，熱望でもなく，感情を持ったものでもなかった。さらにすべての人にとってTessは去りゆく一つの思いに過ぎないのだ····もし自分が無人島に一人きりだとしたら我身に起こったこのことをみじめに思ったであろうか。それほどには思わなかったであろう····みじめさの大半は自分の因襲的み方によって生み出されたものであって，生来の感情によってもたらされたものではなかったのだ。)

では妊娠・出産に伴うHettyの感情はどうであったであろうか。

After the first on-coming of her great dread, some weeks after her betrothal to Adam, she had waited and waited, in the blind, vague hope that something would happen to set her free from her terror; but she could wait no longer. All the force of her nature had been concentrated on the one effort of concealment, and she had shrunk with irresistable dread from every course that could tend towards a betrayal of her miserable secret. Whenever the thought of writing to Arthur had occurred to her, she had reject it: he could do nothing for her that would shelter her from discovery and scorn among the relatives and neighbours who once more made all her world, now her airy dream had vanished.···No, something else would happen—something must happen—to set her free from dread. In young, childish, ignorant souls there is constantly this blind trust in some unshapen chance: it is as hard to a boy or girl to believe that a great wretchedness will actually befall them as to believe that they will die.(15)

(アダムとの婚約後，数週間ほどして来たるべき大きな恐怖を初めて感じたあと，彼女はただ漫然とその恐るべきことから自分を解き放ってくれることが何か起るだろうと期待して，待ちに待っていた。しかしもはや待ってはいられなかった。彼女の中のあらゆる力は，隠さなければならないという一つの努力に集中していた。そして自分のそのみじめな秘密を発覚しそうなあらゆる道筋から抗しがたい恐怖でひるむのであった。アーサーに手紙を書くという考えが浮かぶたびに彼女はそれをしりぞけた。彼女の空虚な夢が消えてしまった今となっては彼はもう一度新たに彼

女の世界を成す親戚や近所の人々の中での発覚と軽蔑から彼女を守ってくれそうなことは何もすることはできないのだ。…いや何かそれより別のことが起るのであろう。—何かが起らなければいけないのだ—恐怖から自分を解放するために。若く子供っぽい無知の人々の中にはある漠然とした機会への盲目的な信頼が常に存在しているものなのである。少年や少女にとっていつか彼らが死ぬ時がくることを信じがたいのと同様に，ひどくみじめなことが彼らの身にふりかかることを信じるのはむずかしいものなのである。)

またHettyが間近に迫ったAdamとの結婚式の用意に足りないものをTreddlestonへ買いに行く時の状態は次のようなものであった。

She hardly knows that the sun is shining;…She only wants to be out of the high-road, that she may walk slowly, and not care how her face looks, as she dwells on wretched thoughts; …Her great dark eyes wander blankly over the fields like the eyes of one who is desolate, homeless, unloved, not the promised bride of a brave, tender man. But there are no tears in them: her tears were all wept away in the weary night before she went to sleep.…Father on there is a clump of tree on the low ground, and she is making her way towards it. No, it is not a clump of trees, but a dark shrouded pool, so full with the wintry rains that the under boughs of the elder-bushes lie low beneath the water. She sits down on the grassy bank, against the stooping stem of the great oak that hangs over the dark pool. She has thought of this pool often in the nights of the month that has just gone by, and now at last she has come to see it. She clasps her hands round her knees and leans forward, and looks earnestly at it, as if trying to guess what sort of bed it would make for her young, round limbs.

No,she has not courage to jump into that cold, watery bed, and if she had, they might find her—they might find out why she had drowned herself. There is but one thing left to her: she must go away, go where they can't find her.[16]

(彼女は日光が輝いていることもほとんどわからない。…彼女はみじめな思いをあれこれ考えながら，ゆっくり歩き，自分がどんな顔付をしているか気にしなくてもいいように，ただただ公道から離れたいと思っているのだ。…彼女の大きくて黒い目は，雄々しくやさしい男の，希望に満ちた花嫁のものではなく，打ち捨てられ，家もなく愛からも見放された人の目のように畑の上をうつろにさまよっている。しかしその目には涙はない。彼女の涙はものういその前の日の夜，眠りにつく前に全部流し尽くされてしまったのだ。…はるか前方の低地にこんもりとした木の茂みがある。彼女はそこに向かって歩いているのだ。いや，それは木の茂みではない。冬の雨を満々とたたえ，にわとこの木の下枝を水面下にひたしている木々でおおわれた暗い池である。彼女はその暗い池に枝をのばしている大きな樫の木の曲がった幹にもたれ草のしげった土手に腰を下す。この一ケ月間夜になるとしばしばこの池のことを考えてきた。彼女は両手でしっかりひざをかかえ，前こごみになり，あたかもそこに我身の若々しくぽちゃぽちゃした手足を横たえたら，それはどんなベッドになるかと考えようとしているかのように，その池を熱心に見つめている。

いや彼女はその冷たい水のベッドに飛びこむ勇気はない。たとえあったとしても人々は彼女を

見つけるだろうー彼らは彼女がなぜ入水自殺をしたかを知るであろう。彼女に残されたことはたった一つしかなかった。逃げなければならないのだ。彼らが彼女を見つけることができないところに行かなければならないのだ。)

Tessの場合はそのことをしっかり我身に受けとめ，積極的にその我身の不幸をのりこえていこうとする萌え出るような生命力を感じるのであるけれども，Hettyはとにかくそれを周りの目から隠蔽することに終始する後向きの姿勢でしかない。全くTessはHettyと同じ17歳とは思えないほど，そしてまたTessを利用して楽をすることばかり考えている怠け者でおろかな両親の娘とは思えないほど賢明でけなげである。George Eliotとはまるで異なりHardyは小説の中で事物に対する説明をほとんどしないのが通例であるけれども，そのようなTessの性格のすばらしさについては珍しくan almost standard woman, but for the slight incautiousness of character inherited from her race（代々受けつがれてきた少々不注意な性格がなかったならば，ほぼ模範的な女性）とcommentしている。[17] そのthe slight incautiousness of characterがTessがAlecに犯されたことの原因でありTessを最高に不運な運命に導く発端を作ったのではあったが，それは先祖から（特にお母さんから）譲り受けた性格なのであってTess自身がどうこうできるものではなかった。それがまたHettyの場合と違うところであって，Hettyの妊娠は言わば彼女の虚栄心に基づく身のほどを知らない子供っぽい幻想の結果だったのである。つまりGeorge Eliotにとっては農民の娘が地主の息子と結婚しladyになることを夢みるなどということは常識はずれの十分罪なる行為であり，Hettyを困窮のどん底におとし入れた妊娠という事実はその罪なる行為のNemesisなのであった。Hettyがそれをとことん隠そうとしたのもそこに理由があるのである。

さらにHettyを追いつめたのは，Hettyの住むHayslope村が紀要十一号で詳しく述べたとおり，Tessの住むMarlottの村とは比較にならないほど閉鎖的かつ保守的傾向が強く，整然とした秩序があって村人はその秩序を乱すことを極度に嫌う風潮があったことである。そのようなHayslopeの村人気質を代表するのがMrs. Poyserであり，Mrs. Poyserがもっとも嫌うHettyの内面の虚栄と虚飾の世界はHayslope村のそのcodeにふれる要素を多分に持っていたのであって，Arthurとの子供の懐妊はそれらHayslope村の村人の定める罪なる行為の顕現なのであった。Hettyが妊娠の事実を村人の目から必死に隠し，さらにその子供を生んで捨てた事実も一切否認し続けたのも無理はない。Hayslopeの村人はそのcodeの中でしか生きられないからである。

その点Tessの場合は，それは半ば不可抗力の不意のできごとの結果なのであって，読者はTessにその事実に関する限り罪の意識を持つことはほとんどない。そのため，Tess自身も前の引用文からもわかるように，周りのまた自らの因襲的な考え方に苦しめられはするけれども，Tessの健全な賢明の考え方も手伝って，それを災難として割り切ろうという積極性を産み出すことができたのである。その積極性がTessに，自分の働く農場の衆目の中で大きく胸をあけ赤ん坊に授乳するという大胆な行為をさせる動力にもなっているのである。17歳といえばいくら思い悩んだあげくひらきなおったTessであったとしても，羞恥心がもっとも強い年頃であるは

ずなのにTessの行為にみられるこのような大胆さは，Hardyが野良に働く女性を見て，A field-man is a personality afield; a field-woman is a portion of the field; she has somehow lost her own margin, imbibed the essence of her surrounding, and assimilated herself with it.[18]（野良で働く男はそのままの１つの人格であるが野良で働く女はその野良の一部であり，いつのまにか自分自身の輪郭を失ない周りの本質を吸収し，それと同化してしまっている。）と述べ，またTessが赤ん坊の死後再生を期してTalbothaysのdiaryに向かった時，そのTessの再び取りもどした元気いっぱいの姿にwomen do as a rule live through such humiliations, and regain their spirits, and again look about them with an interested eye[19]（女というものは概してそのような屈辱を生きぬき元気を回復するものであり，そして再び興味に満ちた目で身の周りを見回すものなのである）と言っていることからもわかるように，女性は大地にも例えられる自然体なのであって，Tessの母親が次から次へとたくさんの子供を生んだように，女性が子供を生むことは春になると草木が芽ぶくと同じような自然現象であるという彼の考え方にもとずくものであった。それゆえHardyは，George Eliotが女性の子供を生む能力に神の人間への罰と祝福という大きな意義を見い出していたのとは異なり，Tessの妊娠，出産に何ら特別の意味は認めてはいないのである。しかし作者の考えはともかく，実際的にはそれは，TessにとってAlecに不本意にも犯されたという隠れた事実を世間に向かって表明するというきわめてむごい運命のしうちを意味した。それでTessは赤ん坊に対して次のような行為をするのである。

> When the infant had taken its fill the young mother sat it upright in her lap, and looking into the far distance dandled it with a gloomy indifference that was almost dislike; then all of a sudden she fell to violently kissing it some dozens of times, as if she could never leave off, the child crying at the vehemence of an onset which strangely combined passionateness with contempt.[20]
>
> （赤ん坊がおなかいっぱい乳を飲むと，その若い母親はひざにまっすぐにすわらせ，はるかかなたを見つめながらほとんど憎悪にも等しい陰うつな冷淡さで子供をあやした。それから突然彼女はあたかもどうしてもやめることができないかのように何十回となく赤ん坊に激しくキスをした。赤ん坊は情熱と軽蔑とがきみょうに入り混じったその襲撃の激しさで泣いた。）

この引用文の中に見られるpassionateness（情熱）はTessの母親としての自覚，すなわち母性による感情であり，contempt（軽蔑）は我身の不幸，災難に対する嘲笑と，さらにまたその災難の底に沈んでいる母親譲りの自己の性格の軽率さへの嘲笑でもあった。彼女のintantはTessにとってまさに母性と軽蔑のはざまにあるthat little prisoner of the flesh[21]（小さな肉の囚人）なのである。つまりそのintantはTessの過ちのそれらの目に見えない隠れた部分を世間にアピールするというTessには全くありがたくないことのためにのみこの世に生まれてきたのであって，それがどんなに短いものであろうともある期間この世に存在したという事実の中に十分存在意義を持つものであった。それゆえ誕生してから一週間後の彼の死がTessの悲劇的運命にもう一つの悲劇をつけ加えるほどの重要性は持ってはいない。しかし彼のはかない命はTessの母性を大いに刺激することになった。Tessがその瀕死の幼ない我子に自らぎこちない洗礼を

施し，彼の死後，ひるむ牧師からその子をキリスト教徒として埋葬する許可を強引に獲得したのも，我子が神の子として神に救われることを願ったからにほかならない。この時のTessの気持の中にはそのinfantの中に歴然としている我身の不幸な運命への軽蔑の概念はすっかり消え去り，一人の母の薄幸な我子への純粋な憐れみと愛だけが存在している。

このようにHardyは子供とは母となる女性から全くの自然的現象によって生み出された新しい生命体であると考え，子供の中に何の神秘も不思議も人類の将来への期待も見い出してはいない。このようなHardyの子供にたいする視方は紀要十一号の*Adam Bede*についての論文の中で詳細に述べてあるGeorge Eliotの児童観[22]とは大いに異なるものであり，その相違がTessのstory, Hettyのstoryの中における子供の存在のweightの相違を生じさせることになる。すなわちTessのstoryの中では彼女が生んだinfantは彼女の不幸の一通過点にすぎないのに対し，Hettyのstoryの中ではそれが終着点であったのである。この相違はHardyはTessのstoryの中で人の背後にある目には見えない“運命”を描こうとしたのに対し，George EliotはHettyのstoryの中でHettyの内面，つまり性格的欠陥に対する応報（Nemesis）としてもたらされた彼女の不幸を描こうとしているという，両作者の小説執筆の姿勢の違い，すなわち彼らの人生観人間観の違いによってもたらされたものであった。

5

かくしてTessのinfantはTessのその後の人生に次々と待ちかまえている悲運の要因となり，NemesisとしてHettyに与えられたinfantはHettyを絞首台に送ることになる。

Hettyの不幸の中に見られるGeorge EliotのこのNemesisの概念は彼女の小説全般の基本をなす考え方であって，*Janet's Repentance*のJanetや*Silas Marner*のGodfrey, *Felix Holt*のMrs. Transome, *Middlemarch*のDorotheaやRosamondに対するNemesisが思い浮かんでくる。しかしそれらの中にはHettyに与えられたNemesisほど過酷なものはない。夫以外の男との間の子供を夫の子として偽り続けたMrs.Transomeですら悲劇の主人公となりうるほどの悲劇的人生を送ってはいない。George EliotはHettyの何に対してそのような厳しいNemesisを招来させたのであろうか。

Hettyがladyになることに憧れ，日頃からぜいたくな世界を夢みていたとしても，そのこと自体にはそれほどの不道徳的側面も罪も見い出すことはできない。紀要十一号の中でも述べたとおり，そのような気持は当時身分の低い女性の中にごく一般的に認められるものなのであった。では他に一体何が考えられるであろうか。George EliotはHettyが想像もつかないほどその性格の中に非情なところを持っていると述べているけれども，そのことは彼女のArthurとの一件には全く関係ないと判断していいであろう。がしかし，このような，storyとは関係のないHettyの性格について作者自身が地の文であえて細々と述べたところに作者のHettyへの本質的嫌悪感を感じるのである。では作者がHettyを嫌悪していたその原因はどこにあったのであろうか。それはやはりHettyの並はずれた美しさにあるものと思われる。

George Eliotは“美しくなかった”自分のコンプレックスのために美しい女性に対して劣等

感を抱いていて，それが作品に出るのだと指摘する批評家は多いけれども，George Eliotの小説に登場する並はずれて美しい女性のみんながみんな彼女のコンプレックスのあおりを受けるとは限らない。もちろんHettyは中でも美貌については群を抜き，表現の豊かなGeorge Eliotもその美についてはどんなに言葉の限りを尽くしても言い足りないほどであったが，George EliotはHettyの美の描写に関する限り，美しい音楽をかなでるように，また画家が美しい対象に向かって感動して絵筆を動かすようなタッチで筆を運びHettyの美しさをむしろ楽しんでいるようにみえ，Hettyが美人であることに嫌悪感を持っているようには全くみえない。George EliotのHettyに対する批判が露骨になるのは，Hettyの美貌が内面の幼なさや道徳的意識の欠乏(moral deficiencies)[23]を隠す隠れみのの役割を演ずることに着目する時である。George Eliotは，Thomas Hardyが登場人物の性格の説明をすることを極力避けているのとは逆に，微に入り細に入りその人のすみずみまで内面をあばくのが好きである。Hettyの性格的欠陥について彼女は次のように言っている。

…The round, downy chicks peeping out from under their mother's wing never touched Hetty with any pleasure; That was not the sort of prettiness she cared about, but she did care about the prettiness of the new things she would buy for herself at Treddleston fair with the money they fetched. And yet she looked so dimpled, so charming, as she stooped down to put the soaked bread under the hen-coop, that you must have been a very acute personage indeed to suspect her of that hardness. Molly, the housemaid, with a turn-up nose and a protuberant jaw, was really a tender-hearted girl, and as Mrs. Poyser said, a jewel to look after the poultry; but her stolid-face showed nothing of this maternal delight any more than a brown earthenware pitcher will show the light of the lamp within it.[24]

(…母鳥の羽の下からのぞいている丸いわた毛におおわれたひな鳥たちの頭もヘティーにはどんな喜びの気持も引き起こさなかった。そのようなものは彼女が関心を持った美しさではなく，ヘティが好んだものは，そのひな鳥たちによって手に入るお金でトレドルストンの市で自分の身を飾るために買う新しいものの美しさであった。でもしかし，かがんで鶏かごの下に水に浸したパンを入れる時，彼女の顔に笑くぼが浮かびとても魅力的にみえたので，よほど敏感な人でなければ彼女がそのような非情な性格であることを見ぬくことはできないに違いない。女中のモリーは上を向いた鼻，出っぱったあごをしているが，まさにやさしい心の持ち主の少女で，ポイサー夫人が言うように家畜の世話をすることにはとても重宝な人であった。でも彼女の愚鈍な顔つきは茶色の陶製の水さしがその中に入っているランプの光を外に見せないのと同様に，この母性的喜びがそこにあることを外に知らせないのであった。)

…it was an excellent divine gift, that gave a deeper pathos to the need, the sin, the sorrow with which it was mingled as the canker in a lily-white bud is more grievous to behold than in a common pot-herb.[25]

(……胴枯れ病がユリの白いつぼに出た時はふつうの野菜の場合よりも見るのがいたいたしいのと同じように，その美〔Hettyの〕の中に混じり合っていた欠乏，罪，悲しみに対してより深い

悲哀を与えたのは優れた神の御業であったのである。)

つまりHettyの悲劇的運命が彼女の容貌の美しさにあるという事実は否定できないけれども，彼女を不幸に導いたものは美貌そのものではなく，外面の美しさと内面の醜さとのギャップなのである。Hettyの性格的欠陥が大きければ大きいほど，Hettyのその後の運命が痛ましいものであることを暗示し，Hettyはその性格的欠陥の大きさを覆い隠すほど美しくなければならなかった。

このようにしてもたらされたHettyの悲劇は，Tessが官能的な唇を持っていたというだけで内面的には一点非の打ちどころのない女性であったのに正視に堪えないほどの痛ましい不幸な一生を送ったのとは大分異なっている。それはHettyの不幸がNemesisとして招来されたものであるのに対して，Tessのそれは自分とは離れた外的力である運命によってもたらされたものだからである。すなわちGeorge Eliotは，人の不幸はすべてその人の内に相応の原因（罪なるもの）があるのであり，その罪に対する神の罰なのであるといい，一方Thomas Hardyにとって人の不幸は予測もつかない突発的できごとなのであって，そこには神は介在していない。

現にHardyは*Tess of the D'Urbervilles*を書いた翌年の1890年１月29日に「神をさがし求めて50年になる。もしも神が存在するなら，発見しそうなものだと思う。もちろん客観的人格としてだー」と記しているように[26]無神論者ではないかという疑いが強い。さらに1892年10月24日のメモに「最上の悲劇—つまり最高の悲劇—は不可避なるものに取り囲まれた価値ある人物の悲劇である。不道徳な無価値な人々の悲劇は最上のものではない」とある。“不可避なるものに取り囲まれた価値ある人物の悲劇”とはTessの悲劇をさしていることは明白であって，このメモからHardyが*Tess of the D'Urbervilles*の中で描こうとしたことは最上の，最高の悲劇であったことがわかるのである。価値ある人が不可避なるものに取り囲まれて起る最高の悲劇などというものはGeorge Eliotの小説の中ではおよそ考えられないものであって，そこには神の介在があってはならず，またあるはずもない。

Hardyが全くの無神論者でなかったとすれば，しばしばTessがEveに，そしてAlecのいるTrantridgeがエデンの園に例えられていることからもわかるように，彼は人間の原罪を重視し，神に見離された人間という観念をよほど強く心に抱いていたに違いない。TessがTrantridgeのAlecの下からMarlottの実家に逃げ帰った時，“You ought to have been more careful if you didn't mean to get him to make you his wife!”（「彼の奥さんにしてもらうつもりがなかったらもっと注意深くするべきだったんだよ！」）[27]という母親の窮地にあるTessへのやさしい慰めの言葉とはほど遠い，叱責ともとれる不用意な言葉に対してTessはかっとなって“How could I be expected to know? I was a child when I left this house four months ago. Why didn't you tell me there was danger in men-folk? Why didn't you warn me? Ladies know what to fend hands against, because they read novels that tell them of these tricks; but I never had the chance o'learning in that way, and you did not help me!”（「どうやって私にそれがわかるっていうの？四ケ月前私がこの家を出た時私はほんの子供だったのよ。男ってものは危険なんだってことをなぜ教えてくれなかったの？良家の娘さんはそういうことから身を[28]

守ることも知ってるわ。このわなのことを教えてくれる小説を読むからよ。でも私は今まで一度もそんなふうにしてそれを知る機会もなかったし，お母さんだってそれがわかるようにしてくれなかっんじゃないの！」と言っているように，TessはAlecとの一件がある前はほんとうに純真な少女であった。この純真さの中にHardyはエデンの園でヘビに誘惑され原罪を犯す前のEveの純真さを重ね合わせているような印象を私は強く感じるのである。

その昔エデンの園で狡滑なヘビに面したEveはまだこの世に生を受けたばかりであり，生まれたての子供のように恐れも悪の存在も全く知らない，まさにTessの，上の引用文の中にあるa chaildであった。そういうEveであったからこそヘビはいともたやすく彼女を誘惑できたのであった。Hardyはその点に着目し，女性の純真さは個々的な評価においては美徳とはなっても，社会的レベルで考えられた場合は決して美徳などではなく，むしろ人格的欠陥とみなしているようである。そういえばギリシャ神話の中でEveと同様のあやまちを犯したPandraも悪を知らない純真な少女であった。Eveの場合，彼女を神の意にそむかせ，神に人間への信頼を喪失させることになった取りかえしのつかないあの大きな罪を彼女に犯させることになったのは，ヘビの誘惑もさることながら，その根底にはこの，Eveの純真な性格があったのである。すなわちEveは自分自身の中には何の罪の意識もなく，半ば運命的な力によってこのような大きな罪を犯すにいたったと言えるであろう。それはまさしくTrantridgeでのTessの過ちと同じものであり，HardyはこのTessの悲劇をEveの悲劇に匹敵する神に見離された人間のたどる至上の悲劇に完成させたのである。

Tessの悲劇に比べればHettyのそれは大そうスケールが小さく見える。それはHettyが，Hardyが“最高の悲劇の主人公にはなりえない”とする“不道徳な無価値な人々”のなかまであり，彼女の不幸が全く自己のあずかり知らない外部的な力によってもたらされたものではなく，その不道徳さ，非情さに対する応報としてもたらされたものであるという，storyの悲劇性を高めるためにはマイナスの要因になる合理性を内包しているからである。しかし読者は窮地に陥ったHettyに対して同情をかきたてられざるをえない。それはHettyの不幸が女性の“生む性”にもとずいたものであるからではなかろうか。紀要十一号で述べたとおり，神はその大いなる罪を犯したEveに対して生みの苦しみを与えたが女性の“生む性”の中には二通りの意味が考えられる。一つは子孫繁栄のための神の人間への祝福であり，もう一つは罪を犯した人間への罰であった。そして罰として与えられた“生む性”の中には男と女の間の絶対的な不平等性があるのである。Hettyの不幸の悲劇性はまさにそこにあった。Tessの場合はそれが偶発的に起こったことであるだけに，それ自体が小説の終着点にはなりえない。しかしHettyの場合はいろいろな要素が結集してそのような結果を生むことになったのであり，応報としてもたらされたその現実に直面したHettyがそれをどのように処置するかということがHettyのstoryの主眼なのである。しかしいくらその不幸が応報としてもたらされたものであっても，HettyとArthurの件においてはAdamが強調しているように，自分は絶対Hettyとは結婚できない立場にあることを自覚しながら単なる遊び心でHettyに近づき，HettyがArthurの妻となりladyになれるような浅はかな幻想を抱き始めていることを知りつつも彼女との関係を絶ち切ることができない

で無知な愚かなHettyをずるずると泥沼に誘いこんでいったArthurに大半の責任がある。それなのにその罪なる行為の応報がHettyにだけ招来されたというその不平等性が彼女の不幸に悲劇的性格を与えているのである。

6

では実際にHettyに自分の生んだ子供を捨てさせる罪に走らせたのは何だったのであろうか。Hettyは生まれたばかりの我子に対してI seemed to hate it－it was like a heavy weight hanging round my neck; and yet its crying went through me, and I daredn't look at its little hands and face.[29]（私はその子が憎らしいと思っていたようだわ—それは私の首のまわりにかかった重たいおもりみたいだったから。でもその子の泣き声は私の体を突きぬけ，それで私はその小さな手や顔を見ることがどうしてもできなかったの。）と言っている。ここにはこの論文の４の部分で述べた，生まれたばかりの赤ん坊に対してTessが抱いたpassionatenessとcontemptに似通った感情が認められるが，Tessがさめた目でその子を見，そしてまたその子と共に歩む自分の将来をも冷静に見つめているのに対して，Hettyの場合はその子供の母親としての自覚も責任もないままに，ただ呆然自失し，その何が何だかわからない恐ろしい現実から必死に逃れようとする愚かさ，幼なさ，moralの低さがきわだって認められる。Hettyはもくろみ通りにその赤ん坊を森に捨て逃亡する。自分を不幸にしている何もかもが取り除かれてもう一度家に帰ることができると考えたからである。以前あれほど恐ろしいと思っていたおば・Mrs. Poyserのこごとも，その時のHettyにはかえってとてもなつかしいものに思われ，何とかもう一度気心知れた人たちの中に帰って心ゆくまで安らぐことを切望したのであった。しかしHettyの罪なる行為もそれまでである。それ以後のHettyは，自分でもわからないある力によって罪の償いにかりたてられる。その力とはHettyの中に芽ばえた母性であった。紀要十二号で述べたようにGeorge Eliotはそのような，子供を生んだ女性しか味わうことのできない母性に対する礼賛の気持が強い。それは自らが望んでも得られなかったその運命的不幸に起因するものであろうが，Hettyの示した母性に対してもEliotはやはり，親と子の間にある，理屈ではない不可解な強い力を認め，賛嘆の気持でそれをながめている。それは以前の愚かで幼く非情だったHettyを，やっと何とか一人の大人の女性へと成長させたからである。Hettyは無我夢中で赤ん坊を捨てたところにもどった時の心の状態を次のようにDinahに告白している。

> :and I turned back the way I'd come. I couldn't help it, Dinah; it was the baby's crying made me go: and yet I was frightened to death. I thought that man in the smock-frock 'ud see me, and know I put the baby there. But I went on, for all that: I'd left off thinking about going home－it had gone out o'my mind. I saw nothing but that place in the wood where I'd buried the baby····[30]
>
> （それで来た道を引き返したの。そうせざるをえなかったのよ，ダイナ。そうさせたのはその赤ん坊の泣き声よ。でもとってもこわかったわ。野良着を着た人が私を見て，私がそこに赤ん坊を置いたってことがわかるだろうって思ったの。でもそんなことかまわずどんどん歩いたわ。家に

帰るってことはもう思わなくなっていたの—それはもうすっかり私の頭から消えていたの。私には赤ん坊を埋めた森のあの場所のほかは何も見えなかったの‥‥)

結局Hettyは母性のその強い力に導かれ赤ん坊を捨てた場所にもどったところを捕らえられ牢獄に送られてしまうのである。そして絞首刑が宣告されるのであるが，若いHettyの生命力はHettyにその死の刑を極端に恐れおののかせる。捕らえられてからHettyが事実をかたくなに否認し続けたのもその刑への恐怖のためであったであろう。

それがDinahの献身によってすべてを告白したことにより，Hettyは現身の体は見捨てられようとも死して後神に救われるという心の安らぎをかちえたのであった。そのようにして絞首刑という厳刑に対する恐れが幾分やわらいだことはHettyの悲劇の一つの救いになってはいるが，しかし，かつて神を信じたことなど一度もなかったHettyにとって死はやはり恐ろしい。おびえるHettyをその死から救ったのは直接的にはArthurがもたらした死の赦免状であったけれども，Arthurにそうさせた背後にはGeorge EliotのHettyの罪がそのような厳刑に匹敵しないものであったという考え方の暗示がある。確かにHettyは森に嬰児を捨て，結果としてその子を死に至らせはしたけれども，彼女はそれに徹し切れず，その現場に引き返したのであった。それはHettyの中にめざめた母性のなせる業であったかもしれない。しかしそれが何であれ，Hettyが罪の発覚への恐怖をものともせず夢中でその現場に引き返したその行為の中にすでに罪の償いがあったのである。事がらの性質上それは誰の心にも訴えかけることのできる償いの行為としては映らない。Hetty自身もそれには気付いてはいない。しかしGeorge Eliotはそれをしっかり見すえている。絞首刑という法的な厳刑は，Hettyが無意識のうちに事前になした罪の償いによって当然軽減されるべき必然性をそなえていたのである。かくしてHettyは刑の執行の直前にArthurが必死に手配して得た死刑の赦免状により島送りに減刑されたのであった。

このようなHettyの最後は情状酌量の余地のなかったTessの最後と異なるものである。それは一口で言えばHardyが言っているようにHettyの悲劇は最上のものでない悲劇であって，Tessの悲劇は最上のものであったということであろうけれども，HettyとTessは共に上流階級の男によって人生を狂わされ，最後は絞首刑を宣告されるという似通った運命をたどりながら，彼女ら自身は全く異なったcharacterであって，従ってその罪も全く異質のものであったための当然の帰結といえよう。

Tessの罪はTessの人生をよく知っている作者と読者にはHettyの罪よりもむしろ情状酌量が与えられるべきと思われるのに，どこにもその余地を残してはいない。そこにTessの悲劇的人生の性格があるのである。

先にものべたようにTessの悲運は表面的にはAlecによってその発端が作られたようにみえ，確かにそれがTessを逆境に導く強い力になっていたことは事実なのだが，しかしTessを不幸におとし入れたのはむしろAngelではなかったであろうか。Angelは，過去のある女としての良心にかけて彼の愛からしりごむTessを追い求め，半ば強引にTessから結婚の承諾を奪い取ったいきさつがあるのにもかかわらず，Tessの良心の命ずる正直なAlecとの過去の告白を聞いたとたん，Tessに対して冷淡というよりもむしろ冷酷な態度をとるようになる。その豹変ぶりは，自

らも別の女性と同棲していた過去をTessに打ち明けた直後のことであるだけにより一層異常にみえる。その上Angelはそれから数日後，その事態からのがれるようにTessを置いて外国に渡ってしまう。

人間はある窮地に追いつめられた時本性を露呈するものであるが，広い心でTessを深く愛した如才ない紳士であったAngelの心の奥にはこのような硬く冷たく，本人以外の誰もが作用することのできない頑固さがあったのである。

すんなりAngelの過去を受け入れたTessと同様にふるまうことはAngelには無理だったのであろうけれども，事前のTessに対するあの炎のような思いの残り火だけでも彼は持てなかったであろうか。直情的な野蛮なAlecもさることながら，このAngelの自己抑制的な異常なかたくなさがTessを限りなく不幸にしているのである。しかしTessはそのようなAngelに対しても以前の愛を失わず，妻として忠誠を尽くし続ける。

先にも述べた通りTessがAlecのいるTrantridgeに奉公にでるようになって彼女の悲劇的人生の一歩を歩み始めたのは貧困にあえぐ家族への彼女のやさしい思いやりであった。また彼女が悔しくもAlecの手に落ちたのも彼女の天使のような純真さゆえのことであり，そしてまた愛するAngelとの離別という寂しく悲しい事態を我身にもたらしたのもTessの，人を裏切ることのできない正直な清い心であった。こうしてみるとTessの美徳はことごとく彼女の不幸と結びついている。そこにTessの悲劇の性格があるのであり，Hardyが言っている価値ある人間の悲劇，すなわち最上の悲劇とはまさにこれだったのである。

悲劇とはある不幸が不当にその人にふりかかる時，周囲の人が感じる感情だと言われるが，上に見た通りTessの不幸はことごとくが不当のものであり，彼女の人生はまさに最高の悲劇的人生であるということができるであろう。これはすべてNemesis(応報)によってもたらされたHettyの不幸とは大いに異なるものであり，Hettyの不幸がTessのそれに比べたら悲劇性が弱いのはそのためである。

ではTessがAlecを殺した罪もまたTessの美徳のなせる業であったのであろうか。Tessが四年ぶりにAlecと再会したのはAngelがTessのもとを去ってから一年ほどした時であった。それはTessがいくら形だけの妻とはいえ暖かい言葉かけの一つもないAngelの冷たさにあいそをつかし，なおかつAngelの帰国を待つことに堪えられなくなり始めていた時で機に乗じていた。最初はAngelの妻としての忠誠心からにべもなくAlecをしりぞけていたTessであったが，Alecがmarriage licence（結婚許可証）をTessに示して結婚を申しこんだ時断固としてそれを拒絶するにはしたもののそのあとTessは次のように考える。

> …she did one moment picture what might have been the result if she had been free to accept the offer just made her of being the monied Alec's wife. It would have lifted her completely out of subjection, not only to her present oppressive employer, but to a whole world who seemed to despise her…[31]
>
> (…もし自由に富裕な〔moneyedであろうか〕アレクの妻になってほしいというそのたった今なされたばかりの提案を受け入れたとしたら，その結果はどうなるであろうかと彼女はチラリと思

った。今彼女をしいたげているその雇い主への屈従ばかりか，彼女を蔑んでいるようにみえる周りの人達みんなへの屈従から，それは完全に彼女を引きあげてくれるだろう…)

その後すぐに彼女は“But no, no! I could not have married him now! He is so unpleasant to me.”(「でも，できない，できないことだわ。今彼と結婚するなんてできっこないわ。彼は私にはとっても不愉快な人なんですもの。」)と言ってはいるが，一分のすきもないほどAngelに対する忠誠心を持っていたTessが，たとえチラリとであってもこのような感慨を抱くようになったことはAngelの自分への冷たい態度の不当性をかなり強く意識しはじめていることを表わすものではなかろうか。

すっきりと離婚するのでもなく，あくまで自分の妻としてTessの身を拘束しておきながら，以前のように愛し合える日が来ることの確約はおろか，二度とTessのもとに帰ることはなかろうという絶望感のみを与えていたAngelのその身勝手さがTessの立場を混乱させていた大きな原因であろう。この点Alecの方がまだしもTessに対して誠意があるようにみえる。直情的で野蛮であったAlecのその性格は四年後にTessと再会した時も変わってはいないけれども，AlecはTessがTrantridgeを去って後自分との間の子供を生み，つらく悲しい人生を続けていることを知り，正式にTessと結婚して責任をとろうとする。AlecのTessへの態度はかつてAngelがTessに対したものと比べれば獣的にみえるけれども，彼の言動にはTessへの真実の愛が垣間みられる。TessがとうとうAlecのもとへ再び行く羽目に陥ったのは，直接的には父親の死によって住む所を失った家族のため，特にTessが熱烈な愛情（an affection which was passionate）を抱いていた五人もの弟や妹たちのためであったが，そうなるべく以前から徐々にTessの心[32]に働きかけていたのはAngel自身なのであった。Angelからのやさしい言葉を待ちに待ってもかなえられなかったTessがAngelとの離別後1年3ケ月ほどしてとうとうAlecの強引な誘惑に屈したのも無理はないであろう。しかしその同棲は結果的にTessのAlec殺害の罪を決定的にするものでもあったのである。

その直後Angelは不意に帰国してTessを探して歩く。Angelが帰国したのは純粋に再びよみがえったTessへのやむにやまれぬ愛からではない。かつて自分がとったTessへの態度が誤っていたのではないかという懐疑は確かに抱き始めてはいたものの，Angelにその非を認めさせすぐさまTessのもとへと帰らせたのはブラジルの奥地を旅行した時知り合った行きずりの心の広い旅人の言葉であった。

TessのAlecの屋敷で不自由なく暮らせるようになりTess自身も別のところでAlecと一応落ち着いた生活をしていたのであるが，その生活はAngelの出現によって再び混乱する。Tessは一たんはどうにもならない現在の自分の境涯のため，目の前に現われたAngelを追い返すが，しかしTessはなおかつAngelに燃えるような愛情を持ち続けていたのである。しかしその時の立場上，TessがAngelとの愛を成就させるためにはAlecを殺すより他はない。かくしてTessはテーブルの上にあった朝食のための肉切りナイフでAlecの心臓を刺し即死させたのであった。

純真な清らかな乙女であったTessを地獄の入口に立たせさんざんTessを苦しめたAlecであ

ったけれども，この最後の姿は非常に痛ましく映る。それはAlecもまたTessと同様にAngelの身勝手さの犠牲者であったからである。Alecは彼なりに精一ぱいTessに，そしてTess一家に尽くしてきたのだ。そのままAngelが帰らなかったら，Tessのもとに夫として戻らなかったら，Tessは不本意ながらもAlecと共に一応平穏な生活を送ったであろう。しかしAngelを目の前にしてTessの彼の妻たる忠誠心と彼への愛がAngelのそのかたくなさ身勝手さを圧倒したのである。

そういったいきさつからすると，TessがAlecを殺した罪は，それだけの値打のない男を終生変わらぬ情熱で愛したTessの純情な一途な心ゆえのものであったといえるであろう。通説では，またこのTessのAlec殺害は，Tessが自らの手でその悲運を絶ち切ることを意味したと言われるけれども，Alecは本当に全面的にTessの悲運の根源であったのであろうか。私はそのようにはどうしても思われないのである。

Tessの悲運は没落貴族の，みめ美わしい長女として生まれたところからすでに始まっていたからである。それからのんだくれで怠け者の父親を持ったこと，彼の代りに仕事に出てふとしたハプニングで一家の大切な馬を殺してしまったこと，そしてそのために気がすすまなかったにもかかわらずTrantridgeに奉公に出ることを決意したこと等々の，Alecとは関係のない細かい事がらそれぞれがTessの悲運に拍車をかけていた。TessがAlecと会ったのも，彼の子を妊娠したのも，またその子供が死んだのも，Talbothaysに新しい職を求めて行ったのも，そこでAngelに会ったのも，この人こそ頼みの人と深く愛したAngelが想像もできなかったほど変わり者であったことも，Alecを殺害せざるをえない状況に追いこまれたこともみんなみんな一貫した不可抗力の彼女の運命だったのである。そういう目に見えない外的力である運命を歩くことを余儀なくされたTessがAlec一人を殺害したとて何になるであろうか。自己の悲運を絶ち切るためにAlecを殺したとすれば，それはTessがそうすることによって自分自身の命をも絶つことである。確かにTessはAlec殺害の背後に絞首刑という自己の死を見，それを覚悟している。しかし自分の死だけを望んだのであればAlecまで殺害する必要はない。Alec殺害は自己の悲運を絶ち切るためうんぬんより，あくまでAngelへの貞淑を守ろうとする心であり，Angelへの燃えるような真実の愛に忠実に生きようとするTessの一途な気持のなせる行為であった。そして結果として一番罰せられなければならないはずのAngelだけがこの世に生きながらえることになるのである。

このようにTessのstoryはすべてが不当な不幸，不当な悲劇，不当な結末で成りたっている。しかしそれらはすべて，おのおのの登場人物の人生が織りなす運命の綾なのであって，その綾は我々の力の及ばない外部的な力，すなわち神によって織られたものなのである。Hardyにとっては運命は予測を許さない。当然こうなるべきと思われることであってもちょっとした手違いで思わぬ結果がもたらされることもある。George Eliotが*Adam Bede*のHettyの悲劇の中で，Nemesisとしてもたらされたもの以外の不運なハプニングも多くは当事者自身の内面的作用によって招来されるべきものと考えるのとは異なり，HardyはこのTessのstoryの中で，全く予想できない悲運に弄ばれる人間を描き，そうすることによってそこに最高の悲劇を展開したので

あった。

総括すればTessの一生はAlecを殺害した後，一週間ほどの逃亡の間Angelとの満ち足りた愛の生活の成就のために費やされた，倦みくたびれるほどのつらく悲しい一生であったといえるであろう。Hettyの悲劇が，幼稚な愚かな精神しか持ち合わせていない17歳の少女がいきなり生む性をおしつけられたことによる悲劇であったのに対して，Tessの悲劇はその押しつけられた生む性にまつわる困難をけなげに克服したのにもかかわらず，それが原因になって人を殺させるほどにまでTessを追いつめた悲運のstoryであったのである。それゆえ*Tess of the D'Urbervilles*は主人公であるTessの絞首刑により完結する。ところがHettyのstoryはHettyの流刑によって事実上小説の舞台から彼女が消えたとしてもそれで完結する訳ではない。Hettyの罪と罰とは単にHettyのものばかりではないからである。それが彼女を取りまく人々に与えた影響の収拾が大きな問題となって残される。George EliotがHettyのstoryをTessのstoryのように，単独の，Hettyを主人公にした小説として完成しなかったのは，Hettyの悲劇それ自体よりもそれがまきこむ周囲の者の悲劇や影響に主眼を注ごうとしたからである。そのため小説の構成上からすればそのstoryはAdamの精神的成長の過程の一つの挿話にしかすぎない扱いがされてしかるべきなのに，Hettyがひじょうにrealに描かれ作者の目が他のどの登場人物に対するよりもHettyに集中されてしまったために小説構成のバランスを失い，*Adam Bede*は一見Hettyが主人公であるかのような錯覚におちいるのである。

Hettyの悲劇的人生それ自体にも確かに読者に訴えるものはたくさんあるけれどもしかし*Adam Bede*の中で大切なのはHettyの人生がAdamやArthurやPoyser夫妻やDinah等に与えた影響なのである。これはHardyが*Tess of the D'Urbervilles*の中でTessの内面や性格や人格を描くことには全く無関心で純粋に彼女の悲運を追及しているのとは小説執筆の態度において大きく異なるものであるといえよう。

そもそもHettyの罪とTessの罪とではその性格が異なるのである。Hettyの罪はNemesisとしてもたらされた不幸，すなわちHettyの過去に社会的あるいは道徳的な規範を犯す行為があったことに対してもたらされたいわば必然的不幸にもとずく罪であるのに対して，Tessの罪は不当にTessを苦しめ続ける自己の運命に敢然と立ち向かう行為の中に犯されたものであった。

Joan BennetがGeorge Eliotの小説に共通した構造をan inner cercle(a small group of individuals involved in a moral dilemma)surrounded by an outer circle(the social world within which the dilemma has to be resolved)〔内部集団（道徳的ジレンマに陥った少数の人々の集団）とそれを取りまく外界（そのジレンマがそこで解決されるべき社会）〕として総括しているが，彼女の小説の中に登場する個人は全くの個人ではありえない。常に外部集団と有機的なつながりをもち，したがってその人個人だけにふりかかる不幸，悲劇などもありえず，それらはその個人を取りまく集団に多かれ少なかれ何らかの影響を及ぼすことになる。この論文の4の部分で引用したAlecの子供を出産した直後のTessの感慨としてHardyがTessの立場を分析しているように「過去は過去である。…彼女は彼女以外の人の誰にとっても存在でもなく経験でもなく熱望でもなく感情を持ったものでもなかった…」というような考え方はGeorge Eliotに

はできない。Hettyの悲劇はまたAdamの悲劇なのであった。そればかりかPoyser夫妻はHettyの罪と罰がまだ幼い子供たちの将来に投げかける影までも心配している。

その点Tessは常に一人で悩み一人で悲運に堪えているようにみえる。Tessの両親とて，Hettyの不幸をPoyser夫妻が驚き狼狽するほどの気持ちをTessの悲運に対して抱いてはいない。Alecを殺して見つかれば絞首刑になることが確定しているTessを目の前にしたAngelとても，同じ刑に服するHettyを見るAdamの悲しみの$\frac{1}{10}$ほども持ち合わせていないようである。Hardyにとって個人は“only a passing thought”(34) なのであった。

すなわちHardyは人間を個としてとらえ，幸も不幸も個々的レベルでしかありえず，親とか友人とかの援助はわずかながら求められはするものの，基本的には人の一生は孤独で寂しく悲しいものであるという悲観主義がその底流にあるのに対して，George Eliotは，人は，身体的にも精神的な意味においてもその者が属する社会の構成要素であり，したがって人の幸せはその社会の規範の中で求められ，不幸はその規範を犯すことによってもたらされるものであるとするのである。このような彼らの人間観の相違によって，お互い似たような人生をたどったHettyとTessのstoryは全く異なったstoryとして展開されることになったのである。

（1989年　1月10日）

注

本文中の*Adam Bede*の引用はCollins CLEAR-PRESS(London and Glasgo, reprint, 1963）を，また*Tess of the D'Urbervilles*はPENGUIN CLASSICS, Great Britain, 1978）を定本とした。

(1) *George Eliot Miscellany,*TEH MACMILLAN PRESS LTD, 1982

(2) *Adam Bede*(collins) Chap.6

(3)『イギリス文学　研究と鑑賞』（内田能嗣，岸本吉孝　三ツ星賢三，創元社　昭和54年）P．P．　75．76

(4)『イギリス文学史』斉藤勇（研究社　昭和39年）

(5) *Adam Bede* Chap.6

(6) 同上

(7) 同上

(8) *Adam Bede,* Chap.33

(9) 同上　Chap.15

(10) 同上　Chap.3

(11) *Tess of the D'Urbervilles (*Penguin Classics) Chap.II

(12) 同上　Chap.XIIX

(13) *Adam Bede,* Chap.16　『ギリシャ神話』のネメシス（因果応報，復讐の女神）

(14) *Tess of the D'Urbervilles,* Chap.XIV

(15) *Adam Bede,* Chap.35'

(16) 同上

(17) *Tess of the D'Urbervilles,* Chap.XIV

(18) 同上

(19) 同上

(20) 同上

(21) 同上

(22) George Eliotは子供は人類の繁栄を担うために神により人類に与えられた恵みであると考える。

(23) *Adam Bede,* Chap.15

(24) *Adam Bede,* Chap.15

(25) 同上

(26) 『20世紀英米文学案内』4　T.HARDY　本多顕彰　研究社　1972年　P．11

(27) *Adam Bede,* Chap.12

(28) 同上

(29) 同上　　Chap.45

(30) 同上　　Chap.45

(31) *Tess of the D'Urbervilles,* Chap.XLVI

(32) 同上

(33) *The English Novel* (Walter Allen, Penguin Books P.221)

(34) *Tess of the D'Urbervilles,* Chap.XIV

参考文献

1．*Felix Holt, the Radical,* by George Eliot, Everyman's Library

2．*Middlemarch,* by George Eliot, The Penguin English Library

3．*Silas Marner* by George Eliot, The Penguin English Library

4．*Scenes of Clerical life,* by George Eliot, Penguin Classics

5．*The Story Bible,* by Pearl S. Buck, Signet

6．*A Wonder Book,* by Nathaniel Hawthorne, Yohan Pearl Library, 1977